

市民が主体となった 共助による地域支援を推進

独立行政法人福祉医療機構（WAM）が行う社会福祉振興助成事業（WAM助成）は、国庫補助金を財源とし、高齢者・障害者などが地域のつながりのなかで自立した生活を送れるよう、また、子どもたちが健やかに安心して成長できるように、NPO やボランティア団体などが行う民間の創意工夫ある活動などに対し、助成を行っています。

今号では、WAM 助成を活用した特定非営利活動法人しかごしまの取り組みを紹介します。

「ひまわりハウス」を開設し 地域の活性化・課題解決に取り組む

鹿児島県始良市にある特定非営利活動法人しかごしまは、市民活動支援を中心に地域の活性化・課題解決に取り組むことを目的として平成22年7月に設立された。

主な活動として、平成26年度から地域の空き家を活用した「ひまわりハウス」（たかちほ）を開設し、誰もが気軽に利用できる憩いの場を提供するとともに、活動を通して地域住民が主体となって地域の課題解決を目指してい

る。

「ひまわりハウス」の開設経緯について、同法人理事長の吉村哲朗氏は次のように語る。

「設立当初は、鹿児島県から市民活動を推進する企業やNPOなどの取り組みを掲載する広報誌の委託事業を行っていたのですが、取材等を通じて市民活動に強い興味をもったことから、直接支援に携わるようになりました。地域の課題は行政だけに任せていても解決するものではなく、地域住民にその必要性を感じてもらうことが重要になります。そのため、『ひまわりハウス』を開設し、近年希薄化している地域住民同士のつながりを再構築するとともに、市民が主体となり地域の課題解決を図ることで、安心して暮らすことのできるまちづくりに取り組んでいます」（以下、「」内の発言は吉村理事長の説明）。

平成26年度から運営を開始した「ひまわりハウス」の活動は、徐々に地域住民に浸透してきたものの、地域内に1カ所しかないことから、高齢の利用者層は無理なく移動できる

◆団体概要

〒809-5603
鹿児島県始良市池島町20-20
TEL: 0995-66-6818
FAX: 0995-66-6820
URL: <http://elkagoshima.net>
設立: 平成22年7月
理事長: 吉村 哲朗

● 助成実績 ●

○平成28年度

「市民が主体となった共助による地域支援推進事業」

（助成額：416万3千円）

事業概要：地域を支える多様な主体が連携・協力し、さまざまな地域課題を解決することを目的に「ひまわりハウス」を拠点とし、高齢者支援活動や異世代間交流活動を展開しながら地域支援を推進する事業

WAM助成を活用し 活動の充実と支援拠点を拡大

これらの取り組みは、平成28年度のWAM助成を活用し、「市民が主体となった共助による地域支援推進事業」として実施した。

同事業は、「ひまわりハウス」の活動をさらに充実させるとともに、支援拠点の拡大を目的に、①地域の空き家を活用したひまわりハウ

範囲内に居住している人に限定されるという課題があった。そのため、平成28年度は多くの孤立しがちな高齢者が地域で安心して生活してもらえよう、ハウス活動のさらなる充実と地域内に複数の活動拠点を整備することに取り組んだ。





「ひまわりハウス」で開催した「健康体操講座」の様子

毎回多くの高齢者が参加する「ひまわりごはん」は、地域住民同士のコミュニケーションの場となった



スの運営、②高齢者支援活動、③異世代間交流活動、④広報誌「ひまわり通信」の発行・配布、⑤新たな活動拠点の整備などを実施した。「ひまわりハウス」を地域住民が主体となった取り組みにするための運営体制は、地域の自治会やコミュニティ協議会の会長、民生・児童委員、一般市民で構成している。これらの委員で「ひまわりハウス運営協議会」を毎月開



介護講座ではタブレットを用いた認知症予防プログラムを実施。初めてタブレットを使った参加者もすぐに操作に慣れ、ゲーム感覚で体験することができた

催し、社会福祉協議会の職員にもオブザーバーとして参加してもらいながら、地域に根ざした活動や継続的な運営に向けて検討した。「ひまわりハウス」は、基本的に毎週火・金曜日の10～16時まで地域住民に開放し、利用者の要望があれば通常の開催日・時間外にも柔軟に対応している。

高齢者をはじめとする地域住民が気軽に集い、地域コミュニティが多様な人たちで構成されていることを体感できる場として、地域住民自らが運営への参加を自発的に行うことを支援しており、音楽や手芸、囲碁・将棋、パソコンなどサークル活動も活発に行われ、地域住民同士のコミュニケーション向上や生きがいをもつことにもつながっている。音楽サークルはハウス内の活動にとどまらず、地域のイベントや介護施設などに出向き、ボランティアで演奏を披露する機会もあるという。

スタッフは、運営協議会の委員が当番制で担い、利用者から寄せられる要望や活動を通して気になる利用者がある際には、運営協議

高齢者支援活動として 「ひまわりごはん」を実施

会で支援方法の検討を行い、行政や支援団体と連携して適切な支援につなぐケースもある。

さらに、「ひまわりハウス」では、通常のハウス活動に加え、高齢者支援活動や異世代間交流活動としてさまざまなイベントを開催している。

高齢者支援活動の取り組みでは、地域で孤立しがちな高齢者や障害者に対し、生活の不安を軽減し、生きがいをもって地域で暮らしもらえるよう、食事会「ひまわりごはん」（全11回）を毎月実施し、地域住民が楽しみながら食事をする機会をつくるとともに、孤食等によるリスク削減も目的にしている。

「地域のなかには独居高齢者や高齢夫婦のみで暮らしている世帯が多く、自分たちが食べる食事の準備の負担が大きく、かなり手を抜いた食事をしているという話を聞きます。そのような食生活を続けていけば栄養不足になり、それが要因で別の病気を引き起こす可能性があります。食事に関する支援は非常に重要なため、現在は『ひまわりごはん』のほかにも、ひまわりハウスの館長がつくった食事を利用者に振舞う「館長ランチ」（月2回）を開始しています。利用者からも好評で、多いときには20人ほどの参加があります。『ひまわりごはん』や『館長ランチ』には、高齢者に限らず地域で暮らすさまざまな世代の人たちの参加があることから、地域住民同士のコ



この著作物は著作権法、国際条約およびその他の知的財産権に関する法律や条約によって保護されています。版権者（独立行政法人福祉医療機構）ならびに著作権者の許可を得ない複製（コピー）、再配布を、固くお断りいたします。

コミュニケーションの活性化にもつながっています」。

そのほかにも高齢者支援活動では、連携する地域の社会福祉法人や企業から講師を招き、介護予防に効果のある「健康体操講座」(全2回)や、タブレットを用いた認知症予防プログラムを行う「介護講座」(全2回)などを実施。介護講座で初めてタブレットを使った高齢者もすぐに操作に慣れ、ゲーム感覚でプログラムを体験することができたという。

子育て世代や高齢者が交流を図る さまざまなイベントを開催

また、異世代間交流活動では、地域で暮らす子どもや家族と高齢者・障害者がふれあう機会をつくり、地域住民同士のコミュニケーションが活性化することで、高齢者や障害者、子どもの見守り、子育て支援などの地域課題の解決につなげることを目的とした。

活動内容として、花見やクリスマスコンサ



異世代間交流活動で行った「そば打ち体験」の様子。高齢者が子どもたちにそばの打ち方を教える場面もみられた

ート、七夕飾りの製作などの季節行事に関することや、そば打ち体験や工芸品の製作などを実施した(全6回)。

「地域の高齢者や子育て世代が一堂に会し、一緒に活動する機会は非常に少ないのですが、イベントでは高齢者が子どもとふれあうことで元気になり、自分の経験・知識を子どもに伝えるといった光景をみることでできた。子どもたちは小学生くらいまでは地域とのつながりがあるものの、それを過ぎると急に関わりが薄くなります。さらに高校を卒業すると半数近くが地域を離れてしまいますので、いつまでも故郷に目を向けてもらいために、小さいときにこのような体験をさせていくことが大切だと考えています」。

このようなハウス活動を地域住民に広く周知する方法としては、活動案内やイベント情報を掲載した広報誌「ひまわり通信」(約2500部)を毎月発行し、地域内で配布している。そのほかにも孤立状態にある高齢者や障害者の情報をもつ民生委員・児童委員を



各ハウスの活動情報などを掲載する「ひまわり通信」を毎月発行し、地域内で配布している

通じ、個別に出向いて参加を呼びかけてもらっているという。

助成期間中(平成28年4月～29年3月)における「ひまわりハウス」の通常活動日の利用実績は延べ1065人となっており、高齢者支援活動では延べ258人、異世代間交流活動では延べ102人の利用があった。利用者数は開設初年度(平成26年)の延べ317人から順調に伸び続けており、活動が地域に浸透している状況がうかがえる。

新たに5カ所の 「ひまわりハウス」を開設

課題であった活動拠点の整備については、地域住民のネットワークを構築したことで活動場所として利用できる建物の情報が集まり、始良市内に新たに5カ所の「ひまわりハウス」(さくらじま、吉野、しげとみ、しらがね、かいもん)の開設が実現した。

「5カ所を新設できた要因は、最初に地域の公民館を活用して『さくらじま』を開設すること、これまでメンバーが限られていた運営協議会に、新設した地域の自治会長が加わり、地域の活動スペースや支援者などの情報が入ってくるようになったことが大きかったと思います。また、団地の集会所を活用した『かいもん』についても、昨年度、社会福祉協議会が集会所でサロンを開催したものの、継続的な運営につながらなかったものが、団地の自治会から運営協議会に相談があったことがきっかけで、ひまわりハウスとして運営することになりました。活動拠点が計6カ所に増



助成事業の成果について吉村理事長は、ハウス活動を通じて地域住民の意識が変わってきたことをあげている。

「ハウス活動を充実するとともに、活動拠点を増やせたことも大きな成果ですが、何より地域住民が地域課題に対し、少なからず危

始良市の「総合事業」の 受託につながる

えたことで、利用者が無理なく通うことのできる環境を整備するとともに、各ハウスの交流活動などにより、地域住民同士のコミュニケーションの活性化がさらに期待できます」。

現在、新設した5カ所の「ひまわりハウス」は、週1〜2回の活動をベースに各地域の地域住民が中心になって運営しており、開催の際には運営ノウハウをもつ「たちまちほ」のメンバーがサポートに入り、活動を見守りながらその地域でキーパーソンになる人材を育成しているという。



平成28年度は、公民館や空き家となった民家などを活用し、新たに5カ所の「ひまわりハウス」を開設（写真上「さくらじま」、写真下「吉野」）

暮らしやすい まちづくりを推進

特定非営利活動法人しかごしま
理事長 吉村 哲朗氏



「ひまわりハウス」を市内6カ所に開設し、広範囲の地域コミュニティが形成されたことで、地域の課題解決に結びつくケースも増えてきました。

例えば、新設した「ひまわりハウス吉野」では、支援者が幼少期に暮らしていた民家を活用しています。利用者のなかに、たまたまその支援者が子どものときにお世話になっていた人がいました。その利用者は認知症の症状があり、入浴やおむつ替えもできず、地域包括支援センターの専門職が介護サービスにつなげようとしても拒んでいたのですが、昔からなじみのある支援者を介することで、サービスを受け入れるようになりました。

高齢者に限らず、このような困難事例は実態がみえにくい面がありますが、本事業を通して市民のネットワークが広がり、地域で困窮している人を発見できる下地はできてきましたので、今後も引き続き課題の解決に取り組み、暮らしやすいまちづくりを進めていきたいと考えています。

機感をもって、自分たちで地域に必要な支援の仕組みをつくるという気持ちが芽生えてきたことがいっばんだ大きな成果だと感じています。最近ではこちらから活動の提案をしなく



ても、地域住民が主体的に活動を企画するケースも多く、『ひまわりハウス』をきっかけに、子ども食堂などの取り組みもスタートしています。

さらに、助成事業で実施した「ひまわりハウス」を拠点とした活動は、平成29年4月にスタートした始良市の介護予防・日常生活支援総合事業の「住民主体運営型介護予防事業」を同法人が受託するという波及効果もあり、活動がさらに広がることが期待される。

WAMからひと言

地域の空き家や活用されていなかった公民館を高齢者支援や異世代交流活動の場とすることで、これまで地域活動に関わりのなかった人の参加を可能にしている点を高く評価します。今後も、交流のきっかけづくりや、住民による共助の意識を醸成しながら、さらなる展開を期待しています。

NPO等の民間福祉活動への
応援よろしくお願いします！

寄付金のお願い

当機構では
寄付金を募集しています

お問合せ先：03-3438-0211（総務部総務課）



社会福祉振興
助成事業に関する
お問い合わせ

●NPO リソースセンター

NPO 支援課（助成事業の相談・募集、NPO の融資相談等）

TEL：03-3438-4756

NPO 振興課（助成事業の広報、事業評価等）

TEL：03-3438-9942 FAX：03-3438-0218（共通）

